

刑法事典

雄子一 編
文瑾浩
柳谷澤
青中宮

立花書房

刑法事典

雄子 編
文瑾 子
柳谷 澤
青中 宮

立花書房

編 者

青柳文雄（元慶応義塾大学教授）
中谷瑾子（慶応義塾大学名誉教授）
宮澤浩一（慶応義塾大学教授）

検 印
省 略

刑 法 事 典

定価1900円

昭和56年10月1日 初 版 発 行
平成元年4月1日 初版第4刷発行

編 者 青 柳 文 雄
中 谷 瑾 子
宮 澤 浩 一

発行者 橘 英 明

発行所 立 花 書 房

東京都千代田区神田小川町3-28-2
電 話 東 京 (03) 291 - 1561
振 替 口 座 東 京 (2) - 196337

©1981 Fumio Aoyagi, Kinko Nakatani, Kōichi Miyazawa

(印刷)文唱堂・(製本)共文堂

乱丁・落丁の際は本社でお取り替えます。

ISBN 4-8037-2315-X C3032

はし がき

刑法典は明治四十年に制定されてから、七十年余を経ている。制定に携わった方々は漢文の素養のある法律家であったから、今から見ると随分難しい言葉が使っており、戦後に制定された刑事訴訟法典にくらべると理解が容易でない。制限漢字にない字も沢山あるから正確に読むことさえ困難である。そこで法務省では二十年余りをかけて刑法の改正を検討して公表しているし、その改正案は近年中に国会に提出されると思われる。しかし、それでも新しい法律ができるまでにはなお三年ぐらいはかかるものと見られる。その改正草案では総則に保安処分が入ることのほかは現行法と根本的に違うわけではない、各則もこれまで特別法に規定していた暴力行為等処罰法をとり入れたり、新しい型の犯罪例えは自動販売機の不正利用の罪を設けたりしたほかは解釈が全く違ってしまふというわけではない。刑法が改正になったところでこれまで積み上げられた刑法理論が無用になってしまふわけではない。これまでの学説、判例は、新しい刑法になってもその解釈を指導することになるだろう。

それに新しい刑法が施行されるまでの数年の間は現行法を解釈し、適用してゆかなければならない。これについては沢山の教科書や注釈書が出ているが、簡単に全体を見渡して必要な知識が得られる事典

は少ないし、それらは何れもかなり年月を経ているので新しい学説、判例の紹介もない。そこで新しく刑法を学ぶ法学部の学生や、昇任試験の勉強をしたり、日常犯罪防止の活動をする第一線の警察官に刑法の基礎的な知識を身につけて貰うために刑法事典を作るという案が出されたのが数年前である。慶應義塾大学の刑法関係の教授等刑事法の専攻者、同大学出身の裁判官、検察官、弁護士、それに同大学の法学研究科博士過程在学の方々に分担を願ってできたのが本書である。

この企画に賛成されて多忙の時間を割いて原稿を寄せられた各位の努力に謝意を表するとともに、全部の原稿を読み直し、統一のとれないところを調整する面倒な仕事を引き受けられた中谷理子教授と、より良いものにするため度々の組み直しに快く応じてくれた立花書房の好意がなければ本書の完成はなかったであろう。ここに記して厚く感謝したい。

読者が本書の趣旨を理解されて本書を十分に活用して下さることを期待する。

昭和五六年八月

編者代表

青柳 文雄

目次

第一編 刑法総論

第一章 刑法一般

第一節 刑法の意義と機能

刑法の意義……………三

刑法と道徳……………三

自然犯と法定犯……………四

刑法の機能……………四

罪刑法定主義……………五

第二節 刑法の法源

刑法典……………五

刑法総則の適用……………六

刑法の法源……………六

刑法改正の動向……………七

慣習刑法の排除……………七

白地刑法……………八

第三節 刑法の解釈

刑法の解釈……………九

体系的考察方法、機能的考察方法……………九

縮小解釈と拡張解釈……………一〇

類推解釈の禁止……………一〇

刑法学派……………一一

第四節 刑法の効力

属地主義……………一二

保護主義……………一二

属人主義……………一二

外国判決と一事不再理……………一三

刑法の効力不遡及の原則……………一三

刑の変更……………一四

限時法……………一四

第二章 犯罪論

第一節 犯罪とその成立要件

犯罪の意義……………一六

主観主義・客観主義……………一六

犯罪の成立要件……………一七

客観的処罰条件……………一七

人的処罰阻却事由……………一八

犯罪の構成要件	一六	条 件 説	三三
犯罪構成事実・構成要件該当性	二〇	相当因果関係説	三三
主観的構成要件要素	二〇	因果関係の中断と断絶	三六
主観的違法要素	二二	原因において自由な行為	三七
目的犯	二三	不作為の因果関係	三六
傾向犯	二四	過失犯の因果関係	三六
表現犯	二四	結果的加重犯	三九
規範的構成要件要素	二四	第五節 犯罪の種類	三九
第二節 犯罪の主体と客体	二五	單純行為犯と結果犯	四〇
犯罪の主体	二五	實質犯と形式犯	四〇
法人の犯罪能力	二五	侵害犯と危険(殆)犯	四〇
両罰規定	二六	即成犯・継続犯・状態犯	四一
身分犯	二七	離隔犯	四三
犯罪の客体	二六	第六節 違法性	四三
法 益	二九	違法性	四三
第三節 行 為	三〇	客観的違法性と主観的違法性	四三
行為	三〇	可罰的違法性	四四
因果的行為論・目的的行為論	三〇	結果無価値と行為無価値	四四
忘却犯	三一	不作為の違法性	四四
作為犯・不作為犯	三一	法益侵害説と規範違反説	四四
真正不作為犯	三三	形式的違法性と實質的違法性	四七
不真正不作為犯	三三	第七節 違法性阻却事由	四七
第四節 因果関係	三三	違法性阻却事由	四八
因果関係	三三	法令による行為	四九

正当業務行為…………… 四〇

正当行為…………… 四〇

自救行為…………… 四〇

被害者の承諾による行為…………… 四〇

推定の承諾による行為…………… 四一

治療行為…………… 四一

安楽死（オイタナジ）…………… 四一

労働争議行為…………… 四一

許された危険…………… 四一

社会的相当性…………… 四一

超法規的違法阻却事由…………… 四二

正当防衛…………… 四二

防衛の意思…………… 四二

防衛行為…………… 四二

喧嘩と正当防衛…………… 四二

誤想防衛…………… 四二

過剰防衛…………… 四二

誤想過剰防衛…………… 四二

対物防衛…………… 四二

緊急避難…………… 四二

避難行為…………… 四二

緊急避難の本質…………… 四二

正当防衛と緊急避難との異同…………… 四二

自招危険…………… 四二

過剰避難…………… 六二

誤想避難・誤想過剰避難…………… 六二

義務の衝突…………… 六二

特別義務者と緊急避難…………… 六三

第八節 有 責 性…………… 六三

責 任…………… 六三

責任の本質…………… 六三

責任の基礎…………… 六三

責任主義…………… 六四

第九節 責任能力…………… 六四

責任能力…………… 六四

責任無能力…………… 六四

限定責任能力…………… 六四

心神喪失者…………… 六四

心神耗弱者…………… 六四

痴 啞 者…………… 六四

刑事責任年齢と少年法…………… 六四

第十節 責任条件…………… 六四

責任条件…………… 六四

結果的加重犯と責任条件…………… 六四

期待可能性…………… 六四

第十一節 故 意…………… 六四

故 意…………… 六四

故意の種類…………… 六四

違法性の意識（認識）	三	責任阻却事由	六
故意説と責任説	三	超法規的責任阻却事由	六
厳格故意説	三	第十五節 未遂	六
制限故意説	三	未遂	六
責任説	三	既遂	六
確信犯	三	実行行為	六
第十二節 錯誤	三	事実の欠缺	六
錯誤	三	実行の着手	六
事実の錯誤	三	予備・陰謀	六
具体的事実の錯誤	三	着手未遂	六
抽象的事実の錯誤	三	実行未遂	六
法律の錯誤	三	終了未遂	六
違法性阻却事由についての錯誤	三	欠効犯	六
幻覚犯	三	障害（碍）未遂	六
第十三節 過失	三	中止未遂（中止犯）	六
過失	三	予備の中止	六
過失犯の構造	三	第十六節 不能犯	六
注意義務	三	不能犯	六
注意能力	三	絶対的不能・相対的不能説（旧客観説）	六
認識なき過失と認識ある過失	三	事実的不能説・法律的不能説	六
業務上過失と重過失	三	具体的危険説（新客観説）	六
信頼の原則	三	抽象的危険説	六
新過失論	三	純主観説	六
第十四節 責任阻却	三	迷信犯	六

第十七節 正犯と共犯

共 犯	一〇
正 犯	一〇
間接正犯	一〇
自 手 犯	一〇
間接正犯における実行の着手	一〇
目的なき故意ある道具	一〇
身分なき故意ある道具	一〇
過失による間接正犯	一〇
必要的共犯と任意的共犯	一〇
集團 犯	一〇
対 向 犯	一〇
共犯独立性説	一〇
共犯從属性説	一〇
最小從属形式	一〇
制限從属形式	一〇
極端從属形式	一〇
誇張從属形式	一〇
擴張的正犯概念と制限的正犯概念	一〇
第十八節 共同正犯	一一
共同正犯	一一
行為共同説	一一
犯罪共同説	一一
共同加功の意思	一一

過失犯の共同正犯 一二

共謀共同正犯 一二

共同意思主体説 一二

承継的共同正犯 一二

片面的共同正犯 一二

同時 犯 一二

第十九節 教 唆 犯

教 唆 犯 一二

過失による教唆犯 一二

未遂の教唆(アシジャン・プロボカトェール) 一二

教唆の未遂 一二

間接教唆と再間接教唆 一二

第二十節 從 犯

從 犯 一二

過失による幫助 一二

片面的從犯 一二

幫助の未遂 一二

幫助行為 一二

事後從犯 一二

間接幫助 一二

承継的從犯 一二

予備的從犯 一二

第二十一節 共犯の諸問題

共犯と中止犯 一二

共犯と身分（一般）	一四
非身分者に身分者が加功する場合	一四
不作為と共犯	一五

第二十二節 罪数論

犯罪の成立と個数	一五
罪数論	一五
罪数決定に関する学説	一六
法条競合	一六
結合犯	一六
包括一罪	一六
継続犯	一六
営業犯	一六
常習犯	一六
接統犯	一六
集合犯	一六
不可罰的事前行為	一六
不可罰的事後行為	一六
觀念的競合	一六
牽連犯	一六
併合罪	一六
併合罪と確定裁判	一六
累犯	一六

第三章 刑罰論

第一節 刑罰の意義

刑罰の意義	一四
保安処分	一四
法定刑	一四
処断刑	一四
宣告刑	一四
不定期刑	一四

第二節 刑罰の種類

生命刑・自由刑・財産刑	一四
名誉刑・身体刑	一四
主刑と付加刑	一四
主刑の輕重	一四
死刑廢止論	一四
懲役と禁錮	一四
罰金	一四
拘留	一四
勾留	一四
代用監獄	一四
勞役場留置	一四
科料と過料	一四
沒收	一四
追徴	一四

第三節 刑罰の適用

累犯加重、併合罪加重	一五
------------	----

法律上の減輕	一五三
酌量減輕	一五三
自首と首服	一五三
刑の免除	一五三
刑の量定	一五三
加減例	一五三
第四節 刑罰の執行	一五三
宣告猶予	一五三
執行猶予	一五三
保護觀察	一五三
刑の執行の減輕・免除	一五三
刑の時効	一五三
刑の執行	一五三
行刑	一五三
監獄と累進制	一五三
仮釈放	一五三
第五節 刑罰の消滅	一五三
刑の消滅	一五三
恩赦	一五三
法律上の復権	一五三
第六節 刑罰の本質	一五三
刑罰の本質	一五三
応報刑論と教育刑論	一五三
目的刑論	一五三

刑罰の個別化	一五三
一般予防と特別予防	一五三
被害者学	一五三
社会防衛論と新社会防衛論	一五三
ディクリミナリゼーション	一五三

第二編 刑法各論

第一章 国家的法益に対する罪

第一節 国家の存立に対する罪

内乱罪

政府顛覆・邦土僭窃と朝憲紊乱

暴動

首魁、謀議参与者、群集指揮者、諸般の職務従事者、附和随行者、暴動関与者

内乱の予備・陰謀罪

内乱幫助罪

第二 外患に関する罪

外患誘致罪

外患援助罪

刑罰の個別化	一五三
一般予防と特別予防	一五三
被害者学	一五三
社会防衛論と新社会防衛論	一五三
ディクリミナリゼーション	一五三
第一章 国家的法益に対する罪	一五三
第一節 国家の存立に対する罪	一五三
内乱罪	一五三
政府顛覆・邦土僭窃と朝憲紊乱	一五三
暴動	一五三
首魁、謀議参与者、群集指揮者、諸般の職務従事者、附和随行者、暴動関与者	一五三
内乱の予備・陰謀罪	一五三
内乱幫助罪	一五三
第二 外患に関する罪	一五三
外患誘致罪	一五三
外患援助罪	一五三

第三 国交に関する罪	一五	犯人蔵匿罪	一四
外国国章損壊罪	一五	蔵匿と隠避	一五
私戦予備・陰謀罪	一五	証憑湮滅罪	一五
中立命令違背罪	一五	犯人蔵匿罪・証憑湮滅罪の共犯	一六
第二節 国家の作用に対する罪		犯人蔵匿罪・証憑湮滅罪と人的処罰阻却事由	一六
第一 公務の執行を妨害する罪	一五	証人威迫罪	一七
公務執行妨害罪(狭義)	一六	第四 偽証の罪	一八
公務員及び公務所	一七	偽証罪	一八
職務行為と適法性	一七	偽証(虚偽の陳述)	一八
公務員(職務)強要罪	一八	虚偽鑑定・虚偽通訳罪	一九
刑法における暴行の意義	一八	第五 誣告の罪	一九
刑法における脅迫の意義	一九	誣告罪	一九
封印破棄罪	一九	誣告	一九
強制執行免脱罪	一九	第六 瀆職の罪	二〇
競売入札妨害罪	二〇	職権濫用罪	二〇
刑法における偽計の意義	二〇	特別公務員職権濫用罪	二一
刑法における威力の意義	二一	特別公務員暴行陵虐罪	二一
談合罪	二一	虐待	二二
第二 逃走の罪	二二	第七 賄賂の罪	二二
單純逃走罪	二二	賄賂罪の本質	二三
加重逃走罪	二三	賄賂の意義	二三
逃走援助罪	二三	賄賂と職務行為	二三
看守者等による逃走援助罪	二四	賄賂罪の主体	二四
第三 犯人蔵匿及び証憑湮滅の罪	二四		

収受・請託・供与	一四	鎮火妨害罪と不作為による放火	二〇三
単純収賄罪・受託収賄罪	一五	激発物破裂罪	二〇三
事前収賄罪	一五	失火罪	二〇四
第三者供賄罪	一五	業務上失火・重失火罪	二〇五
枉法収賄罪	一六	ガス等漏出罪	二〇五
事後収賄罪	一六	第三 溢水及び水利妨害の罪	二〇六
斡旋収賄罪	一六	溢水罪	二〇六
贈賄罪	一六	溢水と浸害	二〇七
賄賂罪と没収・追徴	一七	水利妨害罪・溢水危険罪	二〇七
賄賂罪と共犯	一七	水防妨害罪	二〇七
第二章 社会的法益に対する罪		第四 往来を妨害する罪	二〇八
第一節 公共の平穩に対する罪	一六	往来妨害罪	二〇八
第一 騒擾の罪	一六	往来危険罪	二〇九
騒擾罪	一六	汽車電車往来危険罪	二〇九
群集犯罪と多衆聚合	一六	汽車電車等顛覆破壊罪	二一〇
騒擾行為	一六	過失往来危険罪	二一一
首魁、他人ヲ指揮、率先助勢、附和隨行	一六	往来危険汽車電車等顛覆破壊罪	二一一
不解散罪	一六	第二節 公衆の健康を害する罪	
第二 放火及び失火の罪	一七	第一 阿片煙及び飲料水に関する罪	二二
放火罪	一七	阿片煙に関する罪	二二
放火	一七	飲料水に関する罪	二三
燒燬の概念	一七	公害罪と飲料水に関する罪	二三
放火罪と危険犯	一七	浄水汚穢罪	二四

水道汚穢罪	三四	虚偽私文書作成罪	三五
浄水毒物混入罪	三五	第三 有価証券偽造の罪	三五
水道毒物混入罪	三五	有価証券	三六
水道損壊罪	三六	有価証券の偽造・変造と虚偽記入	三六
第三節 公共の信用に対する罪	三六	第四 印章偽造の罪	三七
第一 通貨偽造の罪	三七	印章偽造罪と文書偽造罪	三七
通貨の偽造・変造・模造	三七	印章・署名・記号	三七
偽造通貨行使罪	三七	不正使用と使用	三八
交付と収得	三八	第四節 風俗及び宗教に対する罪	三八
第二 文書偽造の罪	三八	第一 猥褻・姦淫及び重婚の罪	三九
文書の意義	三八	公然わいせつ罪	三九
作成名義人	三九	わいせつ文書頒布等罪	三九
形式主義と実質主義	三九	強制わいせつ罪	四〇
有形偽造と無形偽造	四〇	準強制わいせつ罪	四〇
代理名義冒用	四〇	強姦罪	四一
代理権限踰越行為	四一	準強姦罪	四一
文書の偽造と変造	四一	強姦致死傷罪	四二
文書の變造と毀棄	四二	淫行勧誘罪と売春取締法規	四三
文書偽造罪における行使	四三	重婚罪	四三
公文書偽造罪	四三	第二 賭博及び富籤に関する罪	四三
虚偽公文書作成罪	四三	單純賭博罪	四三
公務員利用の虚偽公文書作成と間接正犯	四三	賭博と博戲	四四
公正証書原本等不実記載罪	四四	偶然的輸贏	四四
私文書偽造罪	四四	一時の娯樂に供する物	四四

常習賭博罪	三三〇	傷害致死罪	二四〇
賭博場開張・博徒結合罪	三三〇	尊屬傷害致死罪	二四〇
賭博行為の既遂	三三〇	傷害助勢罪	二四〇
富籤罪	三三〇	傷害の同時犯	二四〇
賭博と富籤の區別	三三〇	暴行罪	二四〇
第三 礼拝所及び墳墓に関する罪	三三六	兇器準備集合罪	二四〇
礼拝所不敬・説教等妨害罪	三三六	兇器の意義	二四〇
墳墓発掘罪	三三七	第三 過失傷害の罪	二四七
死体損壊罪等	三三七	過失傷害罪	二四七
死体遺棄行為	三三八	過失致死罪	二四八
損壊・領得	三三八	業務上過失致死傷罪	二四八
変死者密葬罪	三三八	刑法における業務の意義	二四九
第三章 個人的法益に関する罪		重過失致死傷罪	二五〇
第一節 生命・身体に対する罪		第四 墮胎の罪	二五〇
第一 殺人の罪	二四〇	同意墮胎罪	二五一
人と胎児	二四〇	不同意墮胎罪	二五一
普通殺人罪	二四〇	第五 遺棄の罪	二五三
尊屬殺人罪	二四二	單純遺棄罪	二五三
自殺関与罪・心中未遂	二四二	遺棄	二五三
囑託殺人・承諾殺人罪	二四三	保護責任者遺棄・尊屬遺棄罪	二五三
第二 傷害の罪	二四三	遺棄致死傷罪	二五三
傷害罪	二四三	第二節 自由・安全に対する罪	
傷害罪と結果的加重犯	二四三	第一 住居を侵す罪	二五四
		住居侵入罪	二五四

刑法における住居の意義	三五	秘密漏泄罪	三六
刑法における建造物の意義	三六	秘密漏泄行為の違法性阻却	三七
不退去罪	三六	第二 名誉に対する罪	三七
第二 逮捕及び監禁の罪	三七	名誉毀損罪（誹毀罪）	三八
逮捕・監禁罪	三七	死者の名誉毀損と誣罔	三八
逮捕	三七	公然	三九
監禁	三八	名誉毀損罪と侮辱罪との區別	三九
逮捕・監禁致死傷罪	三九	事実の摘示	四〇
第三 脅迫の罪	三九	事実の証明	四〇
脅迫罪	三九	第三 信用を毀損する罪	四一
強要罪（強制罪）	四〇	信用毀損罪	四一
權利行使と脅迫罪	四〇	虚偽の風説の流布	四二
第四 略取・誘拐の罪	四一	第四節 財産に関する罪	四二
略取・誘拐	四一	第一 財産罪一般	四三
営利誘拐罪	四二	財産罪の分類	四三
身代金目的誘拐罪	四三	財物	四三
人身売買	四三	財産上不法の利益	四四
拐取幫助・被拐取者收受罪	四三	不法領得の意思	四四
第五 業務を妨害する罪	四四	第二 窃盜及び強盜の罪	四四
業務妨害罪	四四	領得罪と利得罪	四五
威力業務妨害罪と労働爭議行為	四五	窃盜罪	四五
第三節 秘密・名誉・信用に対する罪	四五	使用窃盜	四六
第一 秘密を侵す罪	四五	所持と占有	四六
信書開披罪	四六	窃盜罪の既遂時期	四六